

教えて、安藤先生！～後編～

中教審 情報・技術ワーキンググループ委員に聞く
AI時代、情報教育の行方は？

CTC未来財団

情報教育が、いま大きく変わろうとしています。教育政策の諮問機関「中央教育審議会」（以下、中教審）では、次期学習指導要領に向け「情報活用能力」の充実が議論されています。仕事や生活に情報技術が欠かせない一方、偽・誤情報やAIが人の認知・意思決定に与える影響など、新たな課題も顕在化しています。こうした変化の中、企業の知見は教育にどう生かせるのか。そしてAI時代に「人」として必要な素養とは何か。前編に続き、中教審で情報・技術ワーキンググループ（以下、WG）委員を務める 広島工業大学教授の安藤先生にお話を伺いました。

「教えて、安藤先生！～前編～」(2026年7月16日発行)

安藤 明伸 教授
(あんどう あきのぶ)



情報教育は「待ったなし」— ITの進化に、教育も本気で追いつく



Q. 次期学習指導要領に向けて、なぜ今、情報教育を大きく変えようとしているのでしょうか。

A：安藤先生

今回の議論全体にあるのは、ものすごい速度で進化するITに対して、教育の側も本気で向き合い、その変化を学びの中に取り込みながら、きちんとキャッチアップしていかなければならないという考え方です。生活

も仕事も、もはやITと無縁ではいられません。だからこそ、情報技術を「使える」だけでなく、その仕組みや特性を理解し、適切に使いこなす力が、誰にとっても必要になっています。これまで日本の情報教育は後手に回っていた部分があります。それを一気に取り戻そうとしているため、学校現場にとっては大きな変化です。情報技術は次々に新しくなりますから、10年程度の周期で見直すだけでは追いつきません。本当はもう少し段階的に進められればよかった面もありますが、日本の情報教育は「待ったなし」。これくらいの危機感を持って取り組むべきなのです。日々変化する情報技術を子ども達がどう理解し、どう活用するのかを、これまで以上に明確に教育の中へ位置付けようとしています。

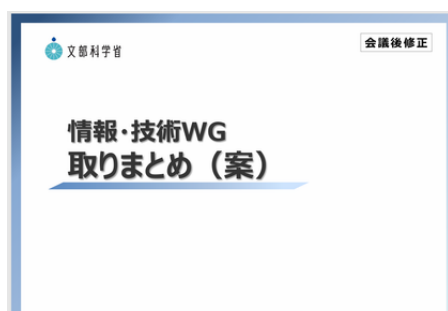
Q. 情報・技術WGでは、具体的にどのような方向が議論されているのでしょうか。

A：安藤先生

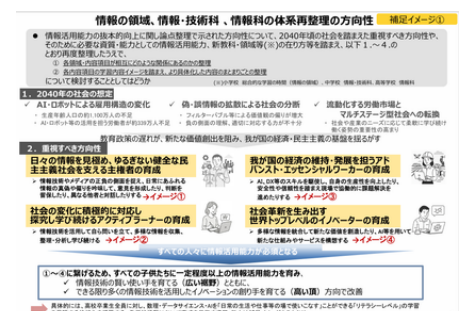
大きなポイントは、「情報活用能力」の捉え方です。情報・技術WGでは、①情報技術の「活用」、②情報モデルやメディアリテラシーなど「適切な取扱い」、③情報技術の「特性の理解」という三つをもとに、育成すべき力を整理する方向を示しています。

特に重要なのは、「まずはICTを使う」という段階から、なぜそのように動くのか、どのような特性があるのかまで理解する教育へ進もうとしていることです。例えば小学校で、写真を拡大すると画像がギザギザに見えることから「画像は点の集まりでできている」と気付くことも、情報技術の特性の理解です。

中央教育審議会 情報・技術ワーキンググループ取りまとめ（案）



目次	
1. 基本的な考え方	1
(1) 情報・技術教育の重要性と学習指導要領の位置づけ	2
(2) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	2
(3) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	2
(4) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	2
2. 教育の目標	3
(1) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	3
(2) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	3
(3) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	3
(4) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	3
3. 教育の目標と学習指導要領の位置づけ	4
(1) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	4
(2) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	4
(3) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	4
(4) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	4
4. 教育の目標と学習指導要領の位置づけ	5
(1) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	5
(2) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	5
(3) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	5
(4) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	5
5. 教育の目標と学習指導要領の位置づけ	6
(1) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	6
(2) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	6
(3) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	6
(4) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	6
6. 教育の目標と学習指導要領の位置づけ	7
(1) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	7
(2) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	7
(3) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	7
(4) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	7
7. 教育の目標と学習指導要領の位置づけ	8
(1) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	8
(2) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	8
(3) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	8
(4) 情報・技術教育の目標と学習指導要領の位置づけ	8



WGでは、小学校の総合的な学習の時間に「情報の領域」を設けることや、中学校の「情報・技術科」、高校の「情報科」へとつながる体系的な学びも検討されています。小学校では体験的な「活用」を重視し、中学校以降は「適切な取扱い」や「特性の理解」を深めていく考え方です。小学校の学習例には「プログラムでオリジナルロボットを作ろう」もあります。実物の機器がない学校への配慮から「画面内のシミュレーションのみの実施でもよい」ということになりましたが、私自身としては、本当は実物を動かすところまで体験してほしい。画面上ではうまく動いても、現実では摩擦などで思うように動かない。そうしたフィジカルな世界の面白さまで経験してほしいと思っています。

AIを「魔法の箱」にしない

Q. 特にAIについて、これからの教育で重要になることは何でしょうか。

A：安藤先生

AIについては、「AIを活用して学ぶこと」と「AI自体を学ぶこと」を分けて考える必要があります。使う目的を十分理解しないまま児童生徒に使わせると、「面倒なことや考えることはAIにやってもらえばいい」という学びになりかねません。

重要なのは「AI自体を学ぶ」ことです。AIに人格や意思があるわけではなく、その裏側にはデータや大規模言語モデル（LLM）、プログラム、確率論があります。もっともらしい誤情報を出力してしまうハルシネーションという現象や個人情報に注意するだけでは十分ではありません。AIを「魔法の箱」にせず、仕組みや特性を理解した上で使う。その順序が非常に重要です。

変化に不安を抱える先生を、社会全体で支える

Q. 学校現場では、先生方にも大きな負担がかかりそうですね。

A：安藤先生

新しい学習指導要領については、特に小学校の先生方は不安が大きいと思います。先生自身も技術の変化についていくのが大変な中で、教科書があるわけでも、教職課程で学んできたわけでもない「情報技術の特性・仕組み」を教えなければならないからです。文部科学省でも教材や研修などの支援が検討されていますが、学校だけで全てを担うのは難しい。ここには企業が力を発揮できる領域があります。使う人にとっての分かりやすさや、心地よさを考えるUI・UX、使う人の立場や困りごとを出発点にものづくりを進める人間中心設計など、第一線で働くエンジニアだからこそ伝えられる内容です。変化の激しい情報技術を社会でどう使っているのかを先生方や子ども達に届け、社会全体で情報教育を支えていくことが重要だと思います。

AI時代、「人」として育みたい力

Q. 情報技術やAIが身近になる中、これからの社会で「人」として大切になる素養は何でしょうか。

A：安藤先生

AIが身近になればなるほど、子ども達には「AIに聞かなければ自分の判断に自信を持てない」人にはなってほしくないと思っています。データやエビデンスを参考にすることは大切ですが、最後は自分で考え、自分の意思で決める。その判断に自信を持てる人であってほしいです。人の判断はデータだけで決まるものではありません。「好きだから」「尊敬しているから」「憧れているから」といった感情や、人との関係の中で生まれる思いもあります。そうした情緒的な部分も含めて意思決定できることは、人間らしさの一つだと思います。AIがさまざまなことを代わりに考えてくれる時代だからこそ、人と関わり、自分とは違う考えに触れ、迷いながら自分なりの答えを出す経験が大切です。情報技術を使いこなす力と同時に、自分で考え、判断し、他者と関わりながら生きていく力を育てることが、今の私たちにも、そしてこれからの教育にも必要だと思います。

一取材を終えて一 2回の取材を通じ、情報・技術WGの議論に携わる安藤先生から、これからの情報教育について直接お話を伺えたことは、大変貴重な機会となりました。特に「情報教育は待ったなし」という言葉から、急速に進化するITに教育も向き合わなければならないという強い危機感を改めて感じました。学校だけに委ねるのではなく、ITと教育、学校と社会をつなぐ「次世代のため」の財団として、CTC未来財団だからこそできることを考え、子ども達の未来につながる学びを一つ一つ形にしていきたいと思っています。

(CTC未来財団事務局 酒井裕美子)

今回の取材の完全版を用意しました。「教えて、安藤先生！～後編～完全版」をぜひご覧ください。